スプラッシュ（四・最終回）

飛沫（しぶき）のあと

市川司幸（いちかわつかさ）

当然のように長い雨が降る季節が過ぎ、当然のように夏がやってきた。

土曜日だったが、友悟は目覚まし時計を七時にかけていた。庭の植木鉢に水をやるためである。まだ電気のついていない廊下を通り、サンダルで外に出ると、既に突き刺すような日差しが辺り一面に飛び散っていた。友悟の眼鏡に、日差しは藁のように鋭い線となって映った。ジョウロに水を汲んで、狭い庭に並べられた鉢に水を注いだ。ペチュニアが昨日よりも多く花開いていた。その隣のペンタスには新しい花が咲いていた。庭はたしかに昨日の景色から変わっていた。

郵便受けの新聞をとり、家に戻ってコーヒーを淹れた。トーストは、あとで焼こうと思った。朝の気温もだいぶ上がって、さすがにホットコーヒーを飲むのがつらくなってきた。氷の塊を三つほどグラスに入れて、コーヒーとミルクを注ぐ。砂糖は入れないのが友悟の決まりだった。

当然のように一時間ほどダイニングテーブルに座ってコーヒーを飲んでいると、二階から結良が降りてきた。当然のように、あの青いパジャマを着て。パジャマの下から、白い素足がのぞいた。まるで海を纏っているみたいだと、友悟はいつも思うことを今朝も思った。

「おはよう友悟」

友悟はテーブルに開いていた新聞紙を畳んで「結良、おはよう」と返した。結良がいつものようにダイニングテーブルにつくと、友悟はキッチンに向かい食パンを二枚トースターに入れた。「昨日のスープが残ってるけど」、結良は「食べる」と言った。

トーストが出来るまで、友悟はダイニングテーブルでコーヒーを飲みながら待つ。その間結良は友悟の読み終わった新聞を取って、占いや天気予報の欄を眺めている。友悟はそんな結良の様子を見つめながら、やっぱり何かがおかしいような気がした。あまりにも整いすぎている。あまりにも上手くいきすぎている。当然のように、清潔な朝が過ぎている。友悟は先週の朝も同じことを思ったし、先々週も、そのさらに前の週の土曜日にも同じことを考えた。

四月まで友悟と結良は別々に暮らしていた。もともと結良は友悟の家に住んでいて、平日はＳＮＳで知り合った男のもとへ、土日は友悟のもとで体を休めていたのだが、ある言い争いがきっかけで結良は友悟の家を飛び出し、それから数か月戻ってこなかった。友悟はさみしさに駆られて、熱帯魚のアロワナに結良のおもかげを重ねて自分を慰めていたのだが、あるとき突然結良が帰ってきた。結良は深夜に友悟のベッドに入り込んでそのまま二人で夜を過ごした。その日から結良は平然と昔のように友悟の家にいる。

友悟はわからなかった。何が？　結良の心がわからなかった。どうして急に結良は帰ってきたのだろう。

何か月も戻らないでいたので、もうこのまま友悟はひとりで暮らしていくつもりでいた。アロワナを飼い始めたのはそのためだったし、結良を忘れよう忘れようと友人に結良を思い出させるようなことを言わないように頼みもした。時々耐え難いさみしさが顔を覗かせることもあったが、それでも少しずつ結良のいない生活に慣れて行けているような気がしていた。そんなときに結良は帰ってきたのだった。積み上げてきた石の塔を、軽々と蹴飛ばして。どうして彼女は帰ってこようと思ったのだろう。

友悟は最初、結良と男の間に何かひと悶着があったのだろうと思っていた。実際、結良が相手の男の言葉や行動に気を病んで家に帰ってくるというのはよくあることだったからだ。結良の感受性はあまりにも敏感で、相手の何気ない言葉の裏を読もうとして不安になる。家に帰って来た次の朝は決まって魚に変わった。

しかし奇妙なのは、今度帰って来てからは、結良が魚になる頻度が減っているということである。結良は「家出」以前は、土日は友悟の家にいて、平日は別の男たちのもとを転々としていて、金曜日の夜に帰って来ると、決まって翌朝に平日の不安や孤独を一気に排出するのだが、「家出」のあとは魚になる頻度が二週間に一回になり、三週間に一回になった。土曜日に備えて金曜日の夜に張っておいた浴槽の水を使うことなく流してしまうことも珍しくなくなった。となると、結良は男との関係が原因で帰って来たわけではないということになる。

じゃあ、どうして帰って来たんだろう。

チン、とトースターが鳴って、友悟はトーストとスープを結良の前に置いた。友悟はバターを、結良はマーマレードを塗って食べた。結良が一枚食べ終わったタイミングで、友悟は「ねえ結良」と声をかけた。

「どうしたの？」

「結良は最近、不安になったりすること減ってるよね。ほら、魚になるのも減ってるしさ」

「友悟もそう思う？　ほんとにね、最近はあまり悩まなくなったの。もちろん、魚になることは今でもあるけど、何ていうか、今まで気にしていたことがあんまり気にならなくなったんだよね」

「それは、どうして？」

「なんだろう。私にもわからない」

「そっか」

話はそれきりだった。

朝食を済ませ、二階にいるアロワナに餌

をやりに行くと、結良も付いてきた。死んだ母親が使っていた部屋の中央に大きな水槽が置かれ、その中で黄色のアロワナが、ホルマリン液の標本のようにじっと漂っていた。パックの中の餌を水槽の上から振りかける。餌がゆらゆらとアロワナの顔に落ちてくると、口を動かしてそれを食べた。

「食べた食べた」

友悟の背後で結良が手を叩いた。友悟は結良が笑っているのが嬉しかったが、変な気もした。この熱帯魚は結良がいなくなったから飼ったものなのに、今自分の後ろには結良がいる。結良がふたりいるようにも感じる。結良がふたり？　いや、アロワナが二匹？　どっちにしろ、同じ生き物が友悟の前と後ろにいるような気がした。

こんなことを考えるのは、きっと夜の間に変な夢を見たからだろうと友悟は思う。おかしな夢を見た後だと、妙にその夢に何か意味があるような気がしたり、目覚めた後の現実も夢のように変な風に見えたりするものだ。友悟はもう一度振り返って結良のほうを見た。ほら、やっぱり結良は結良じゃないか。アロワナなんかじゃない。結良は青いパジャマを着ている。アロワナの鱗は黄色だ。結良は黒髪がすこし乱れて垂れているけれど、アロワナには髪の毛なんて一本もない。結良は笑顔だけどアロワナは目の前の餌に口をパクパクさせているだけだ。どうして結良と魚とを混同することがあるんだ？

こう考えると友悟はすこしずつ心に温かさが戻ってくるような気がした。しかし餌のパックを片付けて部屋を後にしようとすると、またあの不安な冷たさが戻って来た。友悟は思わず結良に尋ねた。

「結良、今、幸せ？」

結良は突然の問いかけに瞬きを二回して、それから不思議そうな顔をして

「幸せだよ？」

と言った。

「僕も幸せだ」

友悟はそう返して、結良のあとを追って階段を下りて行った。

その日、二人は映画館に行き、結良が見たがっていた映画を友悟も一緒に見た。病院を舞台に難病の主人公と、同室の同じく難病の少女の交流を描いた、いかにも観客を泣かせるために撮られたような作品で、友悟は物語の中盤で既にどんな結末なのかがほとんど予測できていた。もし友悟がひとりで映画を見に行っていたら、間違いなく途中で退席していただろう。しかし友悟は席を外さなかった。ちらと隣を見ると、結良は祈るように両手を合わせて、今にも涙をこぼしそうな表情でスクリーンを見つめていた。決して演技しているようには見えなかった。友悟は深く息を吐いてから、もう一度深く席に座り、俳優の動きを凝視しながら、結良と同じように涙を流せる箇所を見つけようとした。

結良は映画が終わってからしばらく泣き続けていた。ハンカチを目に当てて、友悟は結良の背中をさすってやった。友悟のハンカチはすこしも濡れていなかった。やはり結良は自分より感受性が豊かなのかもしれないと思った。あんなに解り切ったストーリーで真剣に涙を流すことは自分にはできない。しかし、あそこで涙を流すことが

できるというのは、果たして幸いなのだろうか。あの感受性で結良は魚になるのだ。浴槽の中でひらひらと尾鰭を揺らし、浴室の電気を反射させて眩い。眩いが、結良の中では黒いものが瘴気を吐いているに違いない。いや、どうしてこんなことを考えているのだろう。さんざん考えてきたことじゃないか。何を今さら。友悟は結良の背中をさすりながら、また渦のような思考のなかに嵌まりかけていた。

その夜、友悟と結良は実に自然に同じベッドに入っていた。結良が使っている部屋のベッドだった。あとで思い返したときに、友悟は自分から結良の部屋に入ったのかどうか思い出せなかった。結良が友悟を誘ったのか、それとも友悟が率先して結良の部屋に入ったのか。そこだけ切り取られているかのように、思い出せないのだった。いや、ほんとうは微かに、結良が友悟の手をとって廊下を進んでいく記憶があるのだが、夢の中の記憶のような気がして、どうも確証がもてない。

いずれにせよ、その夜も友悟の脳裏には千本浜の湾曲した海岸線が見えていた。海岸線は弓のようにしなり、遠くに見える富士の工業地帯が、沼津の水門に限りなく近づいた地点で「パチン」という音がして、友悟の顎の下を汗が伝った。結良の頬に友悟の汗の雫がぽたんと垂れた。結良は微笑してから、裸の体を起こした。

「ねえ、友悟」

「ん？」

「今年の花火大会、一緒に行こうよ」

「沼津の？」

「そう。去年は友悟の仕事が忙しくて行けなかったじゃん？　今年は二日とも休日だから、一緒に行けるよね」

「そっか。今年は土日の開催か。たしか、七月二十五と二十六日」

友悟は傍らのスマホを手に取って、カレンダーを確認した。二日間とも、予定は入っていない。

「うん、何も予定はなかった。一緒に行こう」

その夜、友悟はよく寝むれなかった。

友悟は会社に入った時から、何か目的があって仕事をしているわけではない。この会社に入ったのだって、就職活動にそれほど精を出していなかった彼を心配した年上の友人が、「自分の会社に来いよ、手助けするからさ」と根気よく勧めて、それに従ったら試験に合格できていたのだ。その友人は、とっくに昇進して今は別の支店で働いているという。

デスクワークも、プレゼンテーションも、やらなければならないからやるだけで、他人より高い評価を得ようとか、より多くの給料をもらおうとか、そういう類の欲望は一切なかった。上司から叱られない程度の資料を作る。ミスのない仕事は諦めて、ミスが少ないように(しかし徹底的な確認はせず)仕事を片付ける。そういう態度で働いてきたから、現在の友悟もそれに見合った場所にいるのだった。そこに焦りはない。

しかし花火大会の約束を結良と交わしてからは、友悟の仕事――仕事だけではない。彼の生活すべてに対する向き合い方――が変わった。どう変わったのかというと、友

悟の心に一本の矢印が埋め込まれたのである。これまで海月のように、そのときその場に浮遊していた心は、花火大会に向いてきっちりと固定されたのだ。

仕事の場では、彼の頭の中には花火大会で結良にどんな言葉をかけるかという想像が働いていた。キッチンでフライパンを振っているときは、祭りの場で何を食べるか。洗濯をしているときは、どんな柄の浴衣を着ていくか。行なっていることは普段と変わらないが、何かに突き動かされているようだった。人間は何かに突き動かされているとき、おのずと生活や仕事の質も向上するのかもしれない。彼は久しぶりに上司に褒められた。料理の腕も、この短期間でいきなり上達することはないとはわかっていても、何か繊細なものが備わったように感じられた。

結良は平日の間はやはり別の男のもとに行っていたが、それは友悟にとっては何も憂慮すべきことではなかった。金曜日の夜になれば、結良は必ず帰って来たからだ。そして土曜と日曜とは、結良は友悟の家にいてどこにも行かなかった。結良が自分の目の届く範囲にいてくれるというのはそのまま友悟の安心感につながる。そして何よりも、あの七月二十五日の花火大会があるということが、結良を友悟の近くに引き寄せ、まるで犬をどこかに結んでおくように、そのまま彼の心に結び付けているのだった。

七月二十五日は朝から晴れ渡っていて、千々に雲が流れているだけだった。午前中のうちに、友悟は結良を連れて予約をしておいた浴衣を取りに行った。自動車のクーラーが効くまでに時間がかかって、汗かきの友悟の額には大粒の汗が滲んだ。ミラーを見ると結良もしきりにハンカチを頬にあてている。白いハンカチである。

沼津市街は年に一度の祭りの日ということもあって、どこかそわそわしている様子だった。道路は車の往来がいつもより多かったし、車窓からは、おそらく祭りの実行委員らしい人物たちが注意書きのポスターを貼ったりテントを設営したりしているのが見えた。沼津は、この日が最も人がやってくる。三島や富士、長泉といった近隣の町からはもちろん、静岡や熱海、神奈川からも人がやってくる。これほどの人間がやってくるというのは、花火大会の日を除いて他にない。最近はしきりに沼津市の衰退が不安視されているだけあって、この日に一気に掻き入れたいというのが、沼津の人間の本心だろう。

友悟は藍色の甚平、結良は白地に青と紺の丸菊が描かれた浴衣である。以前予約に行ったときに、友悟は試着室で結良の浴衣姿を一度目にしていた。余計な言葉を用いずに、美しい、と一言で表してしまうのがふさわしいような姿だった。

「やっぱり結良は青が似合うのかもしれない」

結良もこの浴衣を気に入っているようだった。

午後の三時くらいから、二人は出かける支度を始めた。結良は自分の部屋に籠って、浴衣を着つけているらしく、長く出てこなかった。友悟の甚兵衛はそこまで手間取ら

ないので支度は早く済んでしまい、なかなか出てこない結良の部屋をノックしながら、着付けを手伝おうか、と尋ねたが、結良は「自分でやるから」と言って友悟を拒んだ。友悟は、結良がきちんと浴衣に身を包んだ姿を見てほしいので、準備の姿を見られたくないのだろうと思い、あえて部屋に近寄らずにずっと下の階の居間に座っていた。

やがて二階から音がして、階段を下りてくる足音が聞こえてきた。

「お待たせ、準備できたよ！」

声をかけられて友悟が顔を上げると、すっかり祭りの姿になった結良が立っていた。浴衣の袖からこぼれる腕の色は白い生地と変わらなかったので、友悟は結良の生身の体に丸菊が刻まれているのかと思った。結良は友悟にくるっと回転して見せ、「変なところない？」と尋ねた。

「とっても、綺麗だ。すごく綺麗だよ」

「ほんと？　よかった」

「行こっか」と、友悟は結良の手をとって家を出た。夏の盛りの夕暮れはまだ日差しが残されている。山王神社の境内の木々が枝を伸ばして日陰を生んでいる。友悟の家の子どもたちが路地を駆けて、商店街のほうへと駆けていくのを微笑みながら、友悟と結良はふたり並んで歩いて行った。

商店街の周辺は、まだ午後の四時だというのに人がすごい。すでに屋台が車道の両側に整列し、遠目からでも湯気がもうもうと立ち上っているのがわかった。沼津駅前から、ラクーンよしもと劇場の前を通って御成橋に至るまで、屋台がいっせいに湯気を吐き出している。壮観である。そして屋台には浴衣をまとった人々が押し合いへし合いし、その群衆に混じるだけでも体温が上がった。友悟は証券会社のビルのある通りから大通りに入ったが、これが沼津駅前から入ったなら人ごみはもっと濃密に違いなかった。

「すごい込みようだね」

結良が苦笑いをしながら言う。

「今年は去年よりも人が多いね。本当に、すごい人だ」

友悟と結良は手を繋いだまま人ごみの中を進んでいく。時々おもしろい屋台があると覗いていった。祭りの日の屋台は、普段の店で見るものとはまた違った趣があって、いつにも増して輝いて見える。かき氷、焼鳥、綿あめ、アユの塩焼き串。小銭を出してそれらを買って、立ったまま食べたり、特に用もないスーパーボール掬いの、色とりどりのボールが延々と流れているさまを後ろから眺めたりしていると、友悟はあらためて、自分が結良と夏祭りに来ているということを実感させられるのだった。結良は何人もの男たちと床をともにしてきたが、今こうして夕暮れの中を歩いているときは間違いなく結良は自分のものだというふうに思った。自然と握る手に力が入る。友悟は、楽しかった。

金魚すくい屋から金魚が一匹脱け出して、友悟の顔のそばを泳いでいった。流し通りの行列が過ぎると、沼津市街はいっそう込み合ってくる。御成橋の周辺は花火を間近に見ることのできる場所だけあって、すでに何人もの人々が待機している。観覧席になっている狩野川の河川敷も次第に埋まってきた。友悟は結良を連れて、河川敷の席

取りに向かった。幸いに、御成橋を正面に見ることのできる席を取ることができた。友悟が折りたたみのシートを芝生の上に広げると
「さすが、気が利くね！」
と結良が言った。
「だって、ずっと楽しみにしていたから」
友悟はたまらなくなって結良を抱きしめた。結良は友悟の腕を軽く掴んで、
「まだちょっとだけ早いよ」
「ごめん、でもこうしていたいんだ」
からからと結良が笑って、友悟の背中に腕を回した。
日が暮れて、河川敷はいよいよ人で埋まった。川の向こうのビル群に明かりが灯される。御成橋の上を歩く人の明かりと、街の明かりが夜を照らしているが、群衆はもっと大きな光を待っていた。
最初の花火があがった。赤い花火である。ひゅうと音を立てながらあがった一発は、天高い場所で花開いた。続けとばかりに黄色の玉が三つ連続で打ちあがり、すでに消え去った赤い花火の残照を塗りつぶした。打ちあがった花火が破れ、暗闇に残された光を新しい花火が覆うのを何度も繰り返していた。花火の形も、伝統的な菊模様から、冠ろに柳、蜂に千輪と飽きがない。花火が打ちあがるたびに河川敷は波立つように歓声があがり、狩野川の水面には花の模様が、市街の空からは火薬の欠片が降ってきた。
友悟と結良も、周りの人間たちと同様に「おお」とか「わあ」とか声を漏らしながら花火を眺めていたが、決してカメラを取り出そうとはしなかった。携帯電話をとり出せば撮ることはできるが、撮らないのである。友悟は最初から、この花火大会では写真を撮らないことに決めていたのだ。できればこの花火大会は、自分の記憶の中だけに留めておきたい。そんな思いがきっとあったのだろう。そして結良もそんな気持ちを察したらしく、一度もカメラを花火に向けていない。花火は二人の眼だけに映し出されていた。
しばらく打ち続けると、一度花火が止んだ。まだ花火大会が終わる時刻でないところを見ると、一旦ここで休憩を挟むものらしい。花火のあがる音が響いていた沼津は、突然静かになった。急に音が止んだので、周囲の人々も声を出さない。そのとき、結良は友悟の頬に唇を当てた。驚いた友悟の態勢が崩れて、体が右に傾いた。結良はもう一度、今度は友悟の唇に重ねた。友悟も状況を察したようで、姿勢を戻して自分から唇を向けた。
「結良」
友悟は何かを言おうとしたが、その先が出てこなかった。
「友悟」
結良も友悟の名前を呼ぶ。友悟は言いたい言葉がうまく口から出てこなかったが、目の前の結良が恍惚としているので名前を呼ぶだけに留めておいた。きっと結良ならば、自分が何を言おうとしていたのかをそれだけで理解してくれるだろうと、そう思った。きっと、結良ならば。
花火大会も終わりにさしかかり、先ほどよりも多くの花火が空に打ちあがった。最早その様子をひとつひとつ説明していく必

要もないだろう。空には花火、陸にはそれを見上げる人だかりである。最後の花火は大きな菊模様だった。ひとつ間をあけて、ひゅるるると空へ伸びていった花火は、中天で弾け、赤と黄色の美しい色を飛ばして消えた。それが花火大会の終わりだった。

花火を打ち尽くした会場からは、次第に人が減っていった。友悟と結良は人の移動が落ち着くまで、そのまま河川敷で座っていることにした。

ふいに結良が携帯の画面を開き

「このあとちょっと抜けてもいいかな」

「えっ、どうして」

「私の幼馴染がここに来ているんだって。神奈川に住んでいる友達なんだけど、花火を見に沼津に来たから、せっかくだし会おうよ、って。ごめんね。先に帰ってもらってもいい？」

「その幼馴染っていうのは、女性の人？」

「え？」

友悟はその幼馴染が男性であることをおそれた。べつに、男性だったところで何もおそれる必要はないのだが、一抹の不安がよぎった。今夜は結良を他の男性に会わせたくない。

「大丈夫、女性だよ」

結良がそう言うと、友悟は安心した。

「いや、ごめん、変なこと訊いちゃって。じゃあ僕は先に帰ってるね。今日はうちで寝るでしょ？」

「うん、そのつもり。なるべく早く帰るようにするから」

その一言で友悟の不安はなくなった。

すこし人の流れがよくなって、友悟は結良と別れてひとりで家に向かって歩き始めた。それでも御成橋のほうはまだ人が多いようである。河川敷からは御成橋ではなく三園橋(みそのばし)を渡るほうが近いので、友悟はそっちから帰ることにした。花火を見ているときは気が付かなかったが、友悟の背中はいつの間にか汗でびっしょり濡れていた。冷えてすこし肌寒いような気さえする。友悟は少々汗っかきのところがあるが、今夜はそこまで暑いとも思わなかった。人がものすごいので、そのせいで空気が蒸れていたのかもしれない。いや、結良のそばにいることができて内心興奮していたのかもしれない。そんなことを考えながら歩いていると、いつの間に三園橋の前に来ていた。友悟の想像通り、御成橋に比べて人はすくなかった。

三園橋は南北にかかる橋で、下には狩野川の流れがある。橋の上からは先ほど友悟は座っていた河川敷や、沼津中心部がよく見えた。友悟はふと足を止めた。河川敷にまだ結良がいるのか見ようとした。友悟は目が悪い。度の強い眼鏡を顔に押し付けるようにして河川敷を見つめた。すると、結良らしい白い浴衣の女が辺りをきょろきょろ見回しているのを発見した。さっきまで友悟たちが座っていたあたりである。女はしばらく辺りを見回したあと、河川敷のスロープを上って御成橋のほうへ歩き出した。河川敷のすぐそばには神社があって、周辺は木々がいくつか繁っている。結良らしき女はその中に消えた。

友悟は、理由のない不安を感じた。

三園橋を半分渡ったあたりから引き返して、結良のいなくなったほうへ駆けて行っ

た。駆けて行った、といっても、友悟は甚兵衛に下駄、といった姿なのでいつものように全力で駆けることができない。転ばないよう若干の注意を払いながら、それでも急いで走って行った。三人ほどと肩がぶつかったが、頭を下げる暇はなかった。上手く言葉にならない不安が友悟を走らせていた。

結良が入っていった木々の中の道を走り、左手には例の神社がある。

「結良はほんとうに幼馴染と会うのだろうか。誰か男と会うのではないか。結良が誰かと会っているのに割って入るのはできないが、せめて結良がほんとうに幼馴染と会っているのかどうかだけを確認してから帰ろう」

木々の道を通り抜け、住宅街に出た。右に曲がれば御成橋に出る。友悟は左右を見た。すると、ちょうど橋の上を、白い浴衣の女が歩いているのが見えた。間違いない、あの髪の結い方は間違いなく結良である。友悟は結良に気付かれないようにすこし後ろから追って歩いた。橋を渡り、交叉点に出る。屋台が出ていた大通りである。右に行けば沼津駅前に出る。左に行くと沼津港に出る。結良は左に曲がった。港のほうへ歩いて行った。どうして結良が左に曲がったのか友悟には疑問だった。結良によれば幼馴染は神奈川から来ていると言っていた。神奈川から三島に来るとしたら、ほとんどの人は東海道線を使ってくるはずである。この時間、人々の足は沼津駅のほうへ向く。各々の家に帰るからである。そしてその幼馴染も、この時間ならば帰るために駅のほうに向かっているはずだから、結良と会うとしたらそっちの方面になるだろう。しかし結良は、左に曲がった。駅とは反対の方向に行った。友悟の脇腹が痛い。走り過ぎたようである。しかし、ここで結良を見逃すわけにはいかなかった。

交叉点を左に曲がると、人の数は沼津駅方面に比べ格段に少なくなる。友悟は建物の物陰に隠れながら結良を追った。白い浴衣は大通りから細い道に入った。脇腹がますます痛む。冷えていた背中の汗が再び熱を帯びて脇から生ぬるく伝っているのがわかる。

細い道である。結良は後ろを振り向かず、人を探しているように左を見たり右を見たりしていた。そのとき、結良の足どりが急に速くなった。誰かを見つけた様子である。結良は路地を左に曲がった。友悟は結良を追わずに、曲がり角から覗いた。

白い車が止まっていた。日本の車ではない。外国製の高価な車である。そしてその前に結良が立っている。そしてその横に、あの、三島神社の花見で見た男が立っていた。背は高い。たしか名前は「秋元」だったような。男は結良と談笑し、車のドアを開いた。結良は微笑みながらその車に乗り込んだ。男がドアを閉める。

「結良！」

友悟はとうとう角を飛び出して、車のほうに駆けだした。車の中の結良は走って来る友悟を見ると、驚いた顔をした。

「結良、その人は幼馴染じゃないだろう！待ってくれ！」

結良は窓ガラスに左手を貼り付けて、何か言った。しかし声は友悟の耳まで届かな

かった。外国製の車は音をよく遮るのだろう。運転席に乗った男も友悟に気づいたらしく、友悟を指さしながら結良に何か尋ねている。「あの男は知り合いか？」とでも言っているのだろう。しかし、男はすぐに友悟が自分にとって不都合な存在であることを察したらしく、車を動かし始めた。友悟はあと少しで車に手が届く、というところで転倒した。あまりに勢いよく駆けだしたので、バランスを崩したらしい。生憎友悟の履物は下駄である。

車は広い通りに出ると、すぐに走り去っていった。最後に友悟は、結良が悲しげな顔で、しかし諦めの混じった表情で転んだ自分を見ているところだった。

結良はその夜、友悟の家に帰らなかった。

友悟は水槽の前にいた。黄色いアロワナが目の前で揺れている。

七月二十五日から二週間が経ったが、結良はあれから一度も友悟の家に帰っていない。結良の寝室には結良の私物が祭りの日のままに残されているが、それらを取りに来る気配もなかった。おそらくはあの背の高い男――秋元――の家に居候しているのだろう。財布や衣類もそのままだから、それ以外の男のもとに行っているとは考えにくい。

友悟は水槽の上から餌をぱらぱらと撒きながら、アロワナがそれを食べる様子をぼうっと眺めていた。その目には明らかに生気がなかった。ふっと我に返ることがあったが、そうするとまた結良のことを考えてしまうので、また意識を水槽の向こうに放っておくしかない。いっそこうして水槽の前に座ったまま、すうっと意識が薄らいでいけばいいのに、とさえ友悟は思う。

しかしやはり腹は減るし、洗濯などの家事もしなければいけないので、友悟はしばらくすると立ち上がって、キッチンや洗濯場に行くのだった。そうすると否応なく結良のことを考えてしまう。これがつらかった。インターネットで苦境から立ち直る方法を検索して、仕事に熱中して考えるのをやめてしまえばいい、という情報が出てきたので、友悟は平日も休日も問わずパソコンに向かってみたが、これもだめだった。花火大会までの友悟は、結良と出かける事だけを考えて仕事に取り組んでいたので、そのときの高鳴る心境が思い出されて、つらくなってくるのだった。

数日経って友悟は、ひとつの境地に辿り着いた。自分は結良の恋人ではない、という境地である。

考えてみれば、友悟は結良と肉体関係は持っていたものの、恋人の関係になったことはないはずだった。少なくとも、告白をしたりされたことは一度もない。

そうだ、告白をしていないのだから結良は自分の恋人ではない。結良が帰ってきた日に、「そばにいて」と言われたことはあるが、考えてみろ、相手は結良だ。何人もの男と一緒に寝ている女だぞ。「愛してる」とか「そばにいて」なんて、ベッドに入るたびに相手に言っているに違いない。ありふれた台詞なのだ。それをあたかも結良が自分のことを好きであるかのように解釈して、勝手に惚気ていたんだ。考えすぎたんだ。

結良はただ一緒に同棲していた女性で、僕は結良の精神面を支えていた人間に過ぎない。そんな彼女が自分の意志でいなくなったんだから、何を悔やんだり悲しんだりする必要があるんだ？

友悟はそう言い聞かせた。

実際のところ、結良がはじめて家を飛び出すまでは、友悟は本当に自分が結良の保護者であると考えていた。だから結良が他の男のもとに行くことを止めなかったし、結良が自分を誘惑しようとしていたときはそれを拒んだ。なぜなら友悟は保護者だから。保護者は被保護者に干渉しすぎてはいけない。結良が何かをしたいのなら、基本的にはそれを見守ってあげるべきだ。その結果結良が魚になったり、精神が不安定になったら自分が支える。友悟はずっとこのスタイルで結良に接してきたはずだった。そう、最近になって関係性がおかしくなっただけで――

友悟は自分のあるべき振る舞い方を再確認できた思いがした。すると何だか、結良がいない今の状況がまるで理想的な状況のように感じられて、不安や苦痛がやわらぐのだった。友悟にとっての精神勝利法といってもよかった。頭の中に結良の顔がちらつくと、友悟は「自分は保護者だ」と自分に言い聞かせる習慣になった。

友悟の会社では、八月に入ると「夏休み」として社員に一週間ほどの休暇が与えられる。多くの社員はこの休暇を利用して旅行に出かけるのだが、友悟はとくに出かける予定はなかった。友悟は元来静岡県の外に出ない人間だった。旅が嫌いというわけではない。ただなんとなく、旅行をするよりは家の中で新しいレコードやＣＤを聞いていたり、庭いじりをしたりして過ごすほうが好きだったのだ。今年の夏休み、友悟は知人から譲り受けた古いレコードを片っ端から聴くつもりだった。その知人は大瀧詠一のファンで、ヒットチャートに上がることのなかったマイナーなレコードまで集めていたのだが、そのうちのいくつかを邦楽好きの友悟に譲ってくれたのだった。

夏休み初日は部屋に籠ってひたすらレコードを聴いて過ごした。夜になって、ひとりの夕食を済ませると、井上から電話がかかってきた。明日友悟の家に行ってもいいか、とのことだった。

翌日、井上は友悟の家にやってきた。やって来たのはこれで二回目になる。しかし今回は井上ひとりだけではなかった。井上の車から、見覚えのある女性が出てきたのである。西洋人のような顔立ちで、長い髪は金色に染まっている。

「井上、その人」

「ああ、覚えていてくれたか。俺の彼女の恵梨香(えりか)。一緒に連れてきたんだ」

恵梨香は友悟の前に立つと、「はじめまして。恵梨香です」と頭を下げた。礼儀正しい性格らしい、と友悟は思った。

友悟はふたりを居間に招き、アイスコーヒーを振る舞った。

「友悟はさ、昔の音楽がすごい好きで、レコードを何枚も持っているんだよ」

「へえ、そうなんですか！　実は私も最近シティポップにハマっていて、よく聞いているんです」

「シティポップですか。ニュースで見たんですが、世界でも流行っているらしいですよね。うちにもそういう系統のアーティストのレコードはいくつかありますよ」
「え！　本当ですか。見てみたいです」
　友悟は二人を連れて、自分の部屋に案内した。部屋にひとつ、大きな棚があって、そこにはCDやレコードで埋め尽くされている。友悟はその中からいくつかを引っ張り出して恵梨香に見せた。
「シティポップで言うと、自分が持っている中ではティン・パン・アレーとか鈴木茂、あとはユーミンとか山下達郎とかですかね。あ、そうそう。この前知人から大瀧詠一のレコードを譲ってもらったんです」
　部屋の隅の袋から大瀧詠一の盤を取り出して、ベッドに並べた。恵梨香がその中の一枚を手に取った。
「私、この『ア・ロング・バケーション』好きなんです。なんというか、リゾートの雰囲気がぎゅっと凝縮されているような感じがして。彼とドライブに出かけるとき、よく流すんですよ。メジャーですけど、私はやっぱり『君は天然色』が好きで」
「わかります。疑いようもない名曲です」
「歌詞がいいですよね。作詞の松本隆さんの本を読んだことがあるんですけど、大好きだった妹さんが亡くなって、悲しみのあまり世界がモノクロに見えた体験が歌詞になっているんですよね」
「よく知ってますね」
「歌詞の意味とか調べるのが好きですから」
　友悟は『ア・ロング・バケーション』とレコードプレーヤーをリビングに持って行くと、「君は天然色」を流した。部屋が一気に南国の空気に包まれる。大瀧詠一をBGMに、三人は長く談笑した。気が付くと時刻は十三時をまわっていた。二時間近く話したことになる。友悟が昼食を食べないかと誘ったが、二人はこの後レストランの予約をとっているとのことだった。
「友悟、ちょっと話したいことがあるんだけど」
　井上が話を切り出した。
「今度、俺と恵梨香で結婚することに決めたんだ」
　友悟はこの二人がいずれ結婚するだろう、ということは二人の仲睦まじい様子を見て察していたが、その話を今されるとは予想していなかった。
「だから、もし結婚式をするってことになったら、友悟にも来てほしい。良かったら、彼女さんも一緒に」
「彼女さん」という言葉が引っかかった。友悟は自分の顔が一瞬硬直したのを悟ったが、あくまでも自然に、そして嬉しそうに
「わかった。僕もお邪魔させてもらうよ。二人とも、おめでとう。幸せにね」
と答えた。井上と恵梨香は微笑んでから同時に「ありがとう」と言った。
　間もなく二人は友悟の家を去っていった。家には再び友悟がひとり残された。
　ようやく固まりかけた心の殻に、ひびが入った感じがした。そのひびから、なんとか抑えてきた結良への感情が、とめどなくあふれてきた。井上と恵梨香の幸せそうな様子を見たからでもあるし、井上の「彼女さんも一緒に」というのが、最早ごまかしようのないほど突き刺さっていた。

やっぱり自分は結良のことが好きだったのかもしれない。保護者とかではなくて、純粋に結良と一緒にいたかったのかもしれない。確信だった。それだけに、友悟の後悔は強かった。愛していた女性を、友悟はあの男に渡してしまった。そのことへの後悔がぐるぐると頭を巡る。痛かった。抑圧してきたものは、一度溢れ出すと想像以上の勢いで吹き出すらしい。

リビングでは『君は天然色』が流れ続けている。もうそのメロディーに海も砂浜も青空も感じることができなかった。レコードを止めて、どうすることもできない感情に震えながら、自室に戻った。

机の上にスマートフォンが置いてある。友悟は、今すぐ誰かに悩みを打ち明けたかった。自分の話を誰かに聞いてほしかった。スマートフォンを開いて、相談相手になってくれそうな人を探した。電話番号の履歴はいくつもあるが、私的な相談ができるような相手は少なかった。友悟は友人をあまり持たない性格だった。友悟にとって気軽に話ができるのは井上くらいである。友悟は画面をスクロールしながら、自分がいかに他者と関係を持っていないかを見せつけられた。手札が、あまりに少なかった。しかしついに、友悟は相談相手になってくれそうな人を見つけた。友悟はその電話番号に電話をかけた。梨花だった。

駅前商店街の喫茶店。友悟が梨花と会うときは、ほとんどの場合ここになる。通いなれた店だった。

井上たちが帰ってから、もうすぐ二十四時間が経とうとしている。昨日は梨花に都合があって会うことができなかったのだ。友悟は集合時間の二十分前に喫茶店に入り、梨花が来るのを待っていた。夜に寝むれなかったせいで、頭が重い。もし梨花が来なければ、友悟はこのままソファーに寄りかかって寝むっていただろう。

梨花は十分前にやってきた。昨日の友悟の切迫した話し方で、彼の身に何かが起きたことは予想していたが、いざ目の前にしてみると顔つきが明らかに思い悩んでいるときのそれになっていたので、梨花は不安になった。

「どうしたの友悟。何があったの」

友悟は自嘲するかのように

「どうしたらいいかわからないんだよ」

と言った。

「どうしたらいいのかってどういうこと？」

「結良のことが好きなのに、もう遅かったんだよ」

梨花は今にも泣きそうな友悟に根気強く話を聞いた。寝不足で頭が働かないのか、それとも自分の本心を話すのが恥ずかしいのか、友悟の言葉はまわりくどく、梨花の知りたい核心には一筋縄では到達できなかったが、そのたびに梨花は何度も質問をして友悟の悩みを理解しようとした。そして友悟が悩んでいる内容を、彼女なりに解釈した。

つまり、これまで友悟は結良の保護者として世話をしてきたが、本心では彼女のことが好きだった。しかしその本心に気付かずに結良を自由にさせていたせいで、自分が結良を好きだと確信したときには、もう友悟にはどうしようもできなくなっていた、

ということだった。
梨花はここまで理解すると、コーヒーを二杯注文し、それから普段は頼まないケーキも二つ頼んだ。乱れている友悟の心を、一度落ち着けようと思ったのだ。
梨花の作戦通り、コーヒーを飲み、ケーキを食べた友悟は落ち着いてきたようで、少しずつ話し方が明晰になってきた。梨花は、自分の考えを伝えるのならば今のうちだと思った。
「友悟。友悟の話を聞いて、私が思ったことを話すね。それで、今から私は、友悟にすこし厳しいことを言うと思う。だけど、目を逸らさないで聞いてほしい。そうしないと、友悟はこの先もずっと、これまでと同じことをすると思うから」
友悟はうなずいた。視線がまっすぐ梨花に向いている。
「私思ったんだけどね。友悟って、自分は結良さんよりも地に足をつけて生きていると思っているでしょ。さっきから、あなたは保護者って言葉を使うよね。『僕は結良の保護者だと思っていた』とか。保護者ってさ、相手の人よりも物事を知っていなくちゃいけないの。親子の関係にしたって、親は子どもを育てるために、子どもよりもたくさんのことを知っていなくちゃいけない。だから保護できるの。親より子どものほうが物事を知っているのに、親が保護者を名乗るっていうのはできないでしょ。だから、無意識かもしれないけど、あなたは自分が結良さんより上だと思ってる。もちろん、生活の術とか、お金の稼ぎ方とかはあなたのほうが知ってると思うんだけど、私が言いたいのはそういう知識じゃなくて、自分自身と、それから他人に対する知識のこと。自分がどういう人間で、どういう性格なのか。他人はどういう人なのか、どんなことを考えるのか。
あなたは結良さんより自分のほうが物事を知っているようでいて、そのくせ本当に大事なことを何も知らない。それに考えもしない。だから結良さんのことが好きだっていうことに気付かないの。その点結良さんは自分のことをよくわかってる。彼女がいろんな男の人のもとを巡っているのは、そうしないと自分が壊れちゃうって知ってるからでしょ。それに、弱った自分の心を癒すためにあなたの家にやってくるのは、自分が困ったときにあなたが必ず手を差し伸べてくれる人間だってわかっているからでしょ。
でも友悟は自分自身のこと全然知らない。だから自分の考えを伝えることもできないし、結良さんの要求に対してもただ従うことしかできないの。この前言ったよね、そう三島の喫茶店で。『時間をかけて話し合ってね』って。あのあと話し合った？　結良さんとお互いについて話し合った？」
友悟は首を振った。
「ほらね。あなたがそう思っているかはわからないけど、あなたは自分の心にも、他人の心にも踏み込まないの。保護者でもなんでもない。例えるなら、薬剤師と同じ。病気の人がいて、その人のために指示通りの薬を出すけれど、その人を看病することはしない。薬を出しておしまい。それじゃ、結良さんの孤独も、自分の悩みも救えない。
私ね、前に鬱病の友達にこんな質問をさ

れたの。『もしもあなたに心の病を抱えている友達がいて、その友達に、今私を抱いてくれなきゃ私は自殺する、って言われたら、あなたはその人を抱くか』って。もしあなたがこの質問に答えるとしたら、何て応える？」

友悟は少し考えてから、

「抱く。そうしないと、その友達は自殺をする。まずは自殺するっていう状況を何とかしないと。そのあとどうするかはいくらでも考えられる」

と言った。

梨花は友悟の答えにうなずいたあと

「それじゃだめなの。それは、友達の悩みに寄り添っているようで、実は何も寄り添っていない。相手が何を欲しがっているのか、その本当の目的を理解していないから。なのに気持ちだけ助けよう助けようって思っているから、迂闊に手を出そうとする。もし本当にその友達を助けたいのなら、抱かずにずっとそばにいて話を聞いてあげなきゃいけない。まずは理解しなきゃいけない。もし第一に抱いたりしたら、あなたとその友達は切れない鎖で繋がれることになる。その友達は何か悩みがあるたびに、あなたとセックスしようとするだろうし、あなたはそれを断ることができなくなる。そして友達も、セックスでしか自分を解決できなくなる。それは本当の解決じゃない。甘えみたいなものだよ。あなたも友達も、一緒に苦しむことになるよ。それかいっそその友達を見殺しにして、あなただけ平和に暮らす。そのほうがよっぽどましだと思う。

友悟、あなたがしたことは迂闊に友達を抱いたことと全く同じ。でもさっきの話と違うのは、結良さんはもっとたくさんの助けてくれる人がいるってこと。友悟に助けを求めなくても、孤独を癒してくれる人がいる。つまり、あなたひとりだけが結良さんを忘れることができないし、ずっと後悔することになる。あなたが今どういう状況か、わかってくれた？」

友悟の視界が揺れている。揺れに揺れて、目の前の梨花の顔が震えて見える。ようやく友悟は、自分のしてきたことが間違いだったことを理解した。

「じゃあ、これから僕はどうすればいい？」

友悟はか細い声で梨花に尋ねた。

「わからない。今は結良さんがどこにいるかわからないから……」

「もし結良が帰ってきたら？」

「そうしたら、あなたのすべきことは自分が結良さんに何をしたいのかを考えることね。結良さんに何を言いたいのか。これからどうしたいのか。それをしっかり考えて、そこで考えたことをしてみたらどう？　私はあなたじゃないから、具体的な解決策は提示できないけど、少なくとも自分が本当にしたいことをしなきゃ、あなたの悩みは消えないと思う。

でも、私はあなたと結良さんの関係が、以前のように戻ることはないと思う。あなたも結良さんも、少なからず傷を負うことになる。もう、来るところまで来ちゃったから」

「そうか。ありがとう、梨花。僕なりに考えて、もし機会があったら、結良と話してみる」

「それがいいと思う」
友悟は、カップの中に残ったコーヒーを飲み干すと、二人分の会計を済ませて店を出た。八月の夕暮れが真っ赤に空を染めている。商店街は、驚くことに人ひとりいない。端から端まで、ただ店が長く連なっている。友悟は無人の商店街をひとりで歩いていった。

八月の終わりに、アロワナが死んだ。死因は餓死だった。
朝起きて水槽のある部屋に行くと、黄色い魚は口を開けたまま水槽の底に沈んでいた。アロワナは瞬きをしないので、目は水槽の蓋に向けてぽっかりと開かれていた。もしかしたら、今日こそ餌が降って来るのではないかと思いながら息絶えたのかもしれない。
友悟は水槽の水を洗面所に流すと、アロワナを飼育するために買った器具を同じごみ袋の中に詰め込んだ。まるで何度もこの行程を繰り返していたかのように、友悟は手際よく器具を処分し、部屋を片付けた。しかしアロワナの死骸をごみ袋に入れることはさすがに気が引けたようで、仕方なく山王神社の裏側の暗がりに、土をかぶせて放置しておいた。夏は虫が多い。アロワナの体も、虫たちが食い尽くしてくれるだろうというのが友悟の考えだった。
「もうひとりの結良」を処分した友悟は、来る日のために計画を立てることにした。来る日、とは結良が帰ってくる日のことである。友悟はそれがいつになるかはわからないが、結良は必ず自分の家に帰ってくると予想していた。「必ず」とまで思うことができたのは、以前も結良は自分のもとへ帰って来たからだった。
おそらく結良の精神状態は以前より良くなっていて、何週間も家に戻らなくても魚にならない体質になってきているのだろうが、それでもいつかは魚になるときがやってくる。結良が孤独を感じる日がやってくる。友悟はその日を待っていた。結良が家に戻ってきたら、その時に言わなければいけない。

自分が結良のことが好きで、ずっとそばにいてほしいのだということを。自分が本当に結良に言いたかったことを言うんだ。
自分が会社から帰ると、玄関では結良が待っていて「おかえり、友悟」と言ってくれる。「ただいま、今日は何をしていたの？」と訊くと、
「庭の植木鉢に水をやったり、買い物に行ったり、それから音楽を聴いたり。いろいろ。でもやっぱり、友悟が帰ってくるのを待ってた」
そう言って結良はえくぼを見せる。僕のために。土日になれば、車に乗って一緒に出かける。どこに行こうか。富士川の河川敷で野球を見るのもいいし、このまえ港に行ったときに買えなかった魚――ホウボウだっけ――を買って、夕食に料理するのもいい。夕食を食べたら、同じベッドに入る。アロワナの泳いでいた部屋に二人分のベッドを移して、とりとめもないことを話しながら、ゆっくりと寝むりに落ちていく。
友悟はいろいろなことを思い浮かべながら、結良が帰って来たときに言う台詞を、

白い紙に書いていった。書き始めると時間はすぐに経って、空腹も感じなかった。その日がいつやってくるかわからないのに、友悟は自然と不安ではなかった。梨花に言われた言葉が、今まですぐに脇道にそれていた友悟の心をまっすぐ走らせているらしい。

そしてその日は、友悟の想像よりもだいぶ早く訪れた。

九月も折り返したある日の夜、友悟の家のインターフォンが鳴った。ドアを開けると、そこに結良が立っていた。友悟は一目見て、結良が何か悩みを抱えていることに気が付いた。気分がいいときの結良の顔じゃない。「ただいま」と言った声が、かすかに影を帯びている。きっと別の男の間で何かトラブルがあって、それで帰って来たのだろう。まだ夏祭りから一か月も経っていない。

友悟は

「おかえり。帰ってくるのを待ってたよ」

と言って結良を家の中に入れた。まだあのことを言うつもりはない。まずは結良の不安を取り除くことだ。友悟は結良に風呂に入るよう促した。服装から察するに、結良はまだ風呂に入っていないらしかった。

しかし結良はそれを断った。

「そのままでいいの？」

友悟が尋ねると、

「ちょっと海に行きたいの」

と結良は行った。

「ひとりで？」

「ううん、友悟と行きたい」

時刻は夜の九時を過ぎている。こんな夜更けに結良が出かけたいと言うのはこれまでになかった。きっと結良は感傷的になっているのかもしれない。友悟は急いで車を出した。

結良は千本浜に行きたいと言った。千本浜は沼津の南部から富士市南部にかけての海岸で、「千本松原」とも呼ばれる。その名の通り、浜には千本以上の松が生えており、夏場はいい木陰になる。砂利浜の海岸を覆うように、長い防波堤が造られており、堤は日中、サイクリングコースになっていた。生まれてから沼津に住み続けている友悟は、たびたび千本浜を訪れていた。結良と来たことも何回かある。前回は秋に浜を訪れている。

日中は人の多い千本浜も、夜更けとなると人が誰もいない。暗闇の中に、黒い海がうごめいている。

二人は車から降りると、水門側から富士に向かって防波堤の上を歩き始めた。結良は何か言いたげな表情をしていたが、黙ったままだった。それを察した友悟が、気分をやわらげようと

「この浜は僕らの小さいときから全然変わらないね。ずっと浜では松林が青々としていて、防波堤が背伸びをしていて、浜には波が寄せている。ここまで変わらないものも、沼津では珍しいよね。最近は工事でなくなっちゃう店も多いし、商店街の本屋さんも、もうすぐなくなっちゃうっていうしさ」

「うん、さみしいね」

「そういえば、僕が結良を拾ったのも、千

本浜だったよね」
「そうだっけ」
「そうだよ。夜中に散歩しようと防波堤を歩いていたら、向こうからふらふらと歩いてくる人がいてさ。こんな夜中にどうしたんだろうと思って声をかけてみたら、結良だった」
「そういえば、そうだったね」
友悟が結良を拾ったのは、友悟が大学生の頃だった。深夜に防波堤を歩いていた友悟がたまたま結良を見つけ、心ここにあらず、といった状態だった彼女を自分の家で泊めたのが二人の同棲生活の始まりだったのだ。あとで聞いたところによると、結良はあの日自分の家を飛び出し、行き場も無くなって千本浜を彷徨っていたのだという。その時にはもう、魚になる体質になっていたという。
「あの頃に比べたら、結良もだいぶ元気になったよね」
「どういうこと？」
「性格が明るくなったというかさ。ほら、魚になる頻度だって、最近はずっと少なくなったじゃん。表情もいいし」
「ほんと？」
「ほんとだよ。ちょっと笑ってみてよ」
「今？」
「そう、今」
結良はすこし恥じらってから、にっと笑顔を見せた。作った笑顔だけあってすこしぎこちなかったが、友悟は素敵な笑顔だと思った。
「その笑顔、僕は好きだよ」
「ありがとう。そう言ってくれるのはやっぱり友悟だけかも。友悟はずっとそうだった。私がどんな状態のときも、隣にいて見守ってくれる。私は友悟に助けられっぱなし」
「そんなことない。結良だって頑張っているよ」
結良は防波堤の階段を下り始めた。友悟もそれに続く。話が途切れ、二人も夜中の静けさの中に取り込まれた。車の音もなく、二人以外に人の気配もない。波が浜辺に寄せる音が、沈黙の中でたったひとつ聞こえている。友悟と結良は階段を下りながら、砂利浜のほうへ歩いて行った。
二人は波打ち際に立った。千本浜からは尾瀬崎の先端が見える。尾瀬崎の神池には魚の神が住んでいる、というのを、ふと友悟は思い出した。
結良の髪が風に揺られてなびいている。その目はまっすぐ水平線に向けられている。うつくしい顔だった。友悟は結良の顔が好きだった。素直にうつくしいと思えた。
「ねえ、結良」
「ん？」
「僕は結良が好きだ」
一陣の風が通り抜けた。友悟は、あらかじめ考えておいた告白の台詞を思い出そうとしたが、このときに限って思い出せなかった。波にさらわれたのかもしれない。梨花の、「結良さんに何を言いたいのか」という言葉を思い出す。友悟は、今自分が結良に言いたいことを素直に言ってしまおうと思った。
「僕はもっと、ずっと結良のそばにいたい。恋人として、結良の近くにいたい。今こうして、一緒に海を眺めているみたいに、結

良のとなりで生きていたい。僕は結良ひとりを愛するから、結良も僕ひとりを愛してほしい」

結良が友悟の顔を見つめている。瞳がビー玉のように澄んでいる。その目が結良のどんな感情によって輝いているのか、そのときの友悟には判断が出来かねた。友悟は自分が緊張していると自覚していた。しかし、自分が言いたかったことをようやく結良に伝えることができた、という達成感もあった。

結良の目が、一瞬友悟の顔の横へ逸れた。

「実は友悟に、言わなきゃいけないことがあるの」

「え」

結良は友悟に背中を向けた。

「私、明日友悟の家を出ていく。これからは、秋元さんのところで暮らすことに決めたの」

友悟の足元の砂利が消えてなくなった。

「友悟には今までたくさん助けてもらった。もしあの夜、友悟と出会ってなかったら、きっと今私はこの世にいない。友悟にはいくつありがとうって言っても足りないと思う。だけど私も、いつまでも友悟に助けてもらってばかりじゃいけない。自分で自分を支えて行かなくちゃいけない。だから、明日私は友悟とお別れする。私は、私が好きな人と一緒に住む。私を好きだって言ってくれてありがとう。でも、ごめんなさい」

友悟は結良の言葉の意味がわからなかった。どうして自分より秋元を選んだのか。秋元と結良は、おそらく肉体だけの関係だろう。でも友悟は結良に、精神面でも、それから生活の面でも支えてきた。結良が帰ってくる家を、ずっと守っていたのだ。どうして自分よりも秋元を好きになるのか。

「その秋元さんって人とは、体だけの関係じゃないの？　結局結良は、そっちにしか関心がなかったってこと？」

「そうじゃない！　友悟の言う通り、最初は秋元さんとの関係は、体だけだった。でも最近は違う。私が魚になったときは秋元さんが世話をしてくれるし、ごはんだって、洗濯だって秋元さんがやってくれる。他の女の人とは別れて、私だけに時間を使ってくれる。ほんとうに良い人なんだよ。友悟は知らないと思うけど、秋元さんも友悟と同じくらい良い人なの！」

ああ、遅かったんだ。自分が結良に気持ちを伝える前に、向こうが変わってしまっていたんだ。友悟はそう思った。結良は、完全に友悟の代わりになる相手と出会っていたのだった。

結良は友悟に背中を向けたままだったが、肩がかすかにふるえている。泣いて居るのかもしれない。そして友悟も、今にも膝から崩れてしまいそうなのをじっとこらえていた。波の音も耳に入ってこないほどに。

友悟は結良の気持ちが最早わからなかった。もし友悟ではなく秋元のほうに気があるのなら、いっそ以前からそういう態度で接すればいいのに、結良はほんの先月まで、友悟のそばにいたのだった。キスをし、体を重ねた。まるで自分に気があるかのように振る舞ったせいで、今自分はみじめな思いをしているのだ。だんだん、友悟の中に熱いものがこみ上げてきた。人はそれを、「怒り」と言うのだろう。

「結良、どうしてもその男のもとに行くんだね？」
結良は黙ったまま、背中でうなずいた。
「ほんとうに、僕のもとを離れるんだね。これまでずっと、結良のことを支えてきたっていうのに、僕じゃなくて別の男のもとに行くんだね？」
「それ以上言わないで！　私だって、このことを言うのがこわかったの。今日だってずっと、こわかった。愛している人のためとは言え、友悟を裏切らなきゃいけないなんて」
友悟の耳には、結良の言葉はぜんぶ言い訳にしか聞こえなくなっていた。
今、友悟の心には二つの感情があった。ひとつは結良を手放したくないというもの。もうひとつは、結良に腹が立っているということ。友悟は自分が今何をするべきなのかを考えていた。このまま結良を手放したら、また後悔が残るような気がしてならない。今自分がしたいことを、友悟は必死に考えた。そして、あるひとつのことに辿り着いた。
友悟は結良の手を無理やり掴むと、海に向かって引っ張った。結良は何が起こったのかわからないらしく、抵抗することもできなかった。友悟は結良をある程度深い場所まで引っ張っていくと、思い切り海に突き飛ばし、倒れた結良の顔をおさえて海の中に沈めた。ここでようやく結良は、自分の危機に気付いたが、もはやどうすることもできなかった。友悟は、自分が思ったよりも力があることに、ここで気付いた。結良の顔を水中に沈めながら、友悟は悪罵の言葉を叫んだ。言葉は次々にあふれだした。自分がここまでひどい言葉を口に出せることに驚いたほどだった。
次第に結良の指先が鰭に変わっていく。馬乗りになっている結良の体がだんだんと小さくなる。両足が尾鰭に変わる。頭が人間のそれから、魚類のそれに変わっていく。友悟は、結良が人間から魚になる様子をはじめて見た。魚になった結良を助けることはあっても、魚になるまでの過程は見たことがなかったのだ。
ついに結良は、一匹の大きな魚になった。青い体の、うつくしい魚だった。魚になったことを確認した友悟は、そっと手を離した。魚は拘束を解かれると、沖に向かって逃げるように泳ぎ始めた。
友悟は自分のやるべきことをやったという達成感を覚えながら、引き返していった。途中、砂利の中に輝くものを見つけた。拾ってみると、それはいつか結良にあげた、あの海色のビー玉だった。きっと結良がポケットか何かに入れていたのが、落ちたのだろう。それを拾い、友悟はびしょ濡れの服のままで階段をのぼっていった。
真夜中である。海からの風に吹かれて、松林が枝を揺らしている。葉が触れ合う音と、波の音の他に何も聞こえない。友悟は長い防波堤を歩いて戻りながら、あの魚はどこまで泳いでいくだろうかと想像を巡らせた。

『スプラッシュ』完

あとがき

市川です。ここまで『スプラッシュ』を読んでいただき、ありがとうございました。最後にすこしだけあとがきを残しておこうと思います。この小説を書くきっかけについてです。

この小説を書くきっかけになったのは、私の友人の言葉でした。この友人というのは、作中では「梨花」のモデルになっている人です。

ある日、私はその友人に質問をされました。今回の「飛沫のあと」で、梨花が友悟にした「もしもあなたに心の病を抱えている友達がいて～」という質問です。当時の私は友悟と同じ回答をし、その友人に「それじゃだめだよ」と言われ、どうしてだめなのかが理解できずに困惑したのを覚えています。

そのあとで私は友人に質問の意図を聞き、内容を理解しました。改めて考えなおすと、とても深い質問だなと思いました。

それで私は、この質問をもとに小説を書いてみたいと思ったのです。それも、今まで自分が完成させたことのない、すこし長めのものにしてみようと。

小説の構想を考え出したのは去年の一月ごろで、執筆は去年の秋ごろから始めました。今この小説を書き終えたのが七月の終わりですから、私は大体一年半くらいこの小説について考えていたことになります。正直言って、苦しい作業でした。私はもともと、人間の内面を描くよりも行動について書くほうが好きなのです。

でも、ここでこれを完成させることは、何か自分にとって大きな経験になるような気がして、一話一話書いていきました。未熟な人間なので、文体や物語の構成など、読んでくださった方の中には読みにくい場面が多々あったと思います。それに関しては、ここでお詫び申し上げます。

ただ、今回の経験は自分にとって良い財産になりそうです。もしかしたら、またこうした内容の小説を書くかもしれません。そのときはまたお付き合いいただければと思います。

最後に、この小説を読んでくださったすべての方々、そして感想をくださった方々、応援してくださった方々、この小説を書くきっかけをくれたY・Iさんに、心からの感謝を申し上げて、あとがきといたします。

ありがとうございました。

二〇二三年七月三〇日　　市川司幸